

S. Swanson '75

神学と人文 第15集 1975年12月発行抜刷

主の晩餐におけるキリストの現在 (I)

—今日のエキュメニカルな神学的対話への
ジョン・ウェスレーの貢献をめぐって—

岩 本 助 成

主の晩餐におけるキリストの現在

—今日のエキュメニカルな神学的対話への
ジョン・ウェスレーの貢献をめぐる—

岩 本 助 成

I 序

II 主の晩餐⁽¹⁾におけるキリストの現在

—今日のエキュメニカルな神学的対話から—

III ウェスレーの聖餐論 (以下次集)

- (1) その歴史的、神学的背景について
- (2) 「ウェスレーの聖餐論」概観
- (3) 特に「キリストの現在」をめぐる

IV 結語

I 序

John Macquarrie は彼の近著 Paths in Spirituality において、その実存論的神学を背景に持った聖餐論を展開している。⁽²⁾ マッコリーは、一方で聖餐の重要性を強調する。聖餐には、礼拝、神学及びキリスト者生活のすべてが含まれる。そこには重要な問題——聖餐と御言との密接不離の関係、霊と身体と感覚との一体性、カルバリーの犠牲と復活の主の現在との関係、神と人との交わり——が関連して存在する。聖餐のパンとぶどう酒という物象を通して創造論が問われるのを始めとして、贖罪、和解、聖化へと聖餐論の輪が広がって行く。就中、受肉論との関係は大きい。教会論はその根底に伏在し、又、天の祝宴を示しつつ聖餐論は終末論と結ぶ。彼は聖餐がいかに広い視野のもとに問われるべきかを言い当てている。

他方、マッコリーは、聖餐において最も根本的な問題は、「聖餐におけるキリストの現在」であると述べる。⁽³⁾ 「現在」(presence) には三つの形がある。時間的現在、場所的現在、人格的現在である。彼の神学的立

場から見て、第三の「人格的現在」を中心として取り扱って行くのは当然と言えば当然であるが、人格的現在が時間や場所と無関係でない事をも言い添えている。彼の実存論的な聖餐理解は筆者にいくつかの疑義や異論を抱かせるのであるが、前述の二点を最も基本的なものとして提出している点は評価して置きたい。

周知の如く、聖餐は論争史に色どられている。この事実は、第一にその重要性を暗示し、第二に様々な誤解や無知の存在を明示し、第三に聖餐は理解や解釈に止まらず、教会全体として、又、キリスト者一人一人として、深刻な経験とならねばならぬ事を実証していると思う。以上の三点を銘記しながら進展すべき今日のエキュメニカルな神学的対話において、聖餐の問題、殊に「キリストの現在」の問題は、どのように考察されているのであろうか。ローマ・カトリックとプロテスタントとの間で、この問題はどのような接点に到達しようとしているのであろうか。我々は先ずこの点に関して、ルター、ローマ・カトリック共同声明を検討して見たい。次いでカルヴェン派の神学者 M. Thurian が提出する「主の晩餐におけるキリストの現在」に関するテーゼを考察しながら、単に一致とか相違とかを比較する事を離れて、問題の核心により接近したい。

本小論の後半は、歴史的研究の領域を加えており、John Wesleyの聖餐論が同じ問題に焦点を合わせて論じられる。ウェスレーは生涯変わる事なく聖餐を重要視した。彼が執行し陪餐した回数は驚くばかりに多い。回数の方で事の重要性を測るのを彼は拒否した。⁽⁴⁾ だが同時に、習慣的に他律的に物事をなすことを嫌った彼が、何故、後に詳述する程の聖餐尊重を実践したかと言う事は、一考に値するものである。ウェスレーの聖餐経験についてこうも考えられまいか。彼を第十八世紀の英国における福音的信仰覚醒運動 (the Evangelical Revival) ⁽⁵⁾ という視点においてのみ把握しようとする者は多い。しかしもし研究者がウェスレーと彼の運動の底流として常に発見できる、「聖礼典 (殊に、聖餐) 覚醒運動」とでも呼べるような何物かとの関連でそれを把握する事に失敗するならば、ウェスレー

とその運動の総体的把握は困難となろう。更に彼の神学的特質も十分に理解されなくなる。そこで筆者はウェスレーの聖餐論の歴史的系譜を尋ねつつ、彼及び初期メソジストの信仰と実践を探り、それらを福音的信仰覚醒運動と聖餐覚醒運動との調和と力動的関係から見て行きたいと願う。そしてそこに今日のエキュメニズムに対するウェスレーの貢献と問題提起とを発見したい。

Ⅱ 主の晩餐におけるキリストの現在

—今日のエキュメニカルな神学的対話から—

1967年12月、「ユーカリスト」と題するルーテル、ローマ・カトリック共同声明が発表された。ルーテル派及びローマ・カトリック派からそれぞれ十数名の神学者が共同討議に参加し、「犠牲としてのユーカリスト」及び「主の晩餐におけるキリストの現在」の二項目にまとめて報告したものである。⁽⁶⁾ 資料として決して新しくはないが、注目すべき内容を我々が当面している課題に対しては持っているものと思う。以下に後者のみを探り上げる。

声明は先ず、神のことばであり、この世の主なるキリストの多様な現在を告白する。十字架と復活の主なるキリストは、その体なる教会に現在されるし（マタイ 18：20）、洗礼や聖書の朗読、福音の宣教にも、そして主の晩餐にも現在される。「まことの神にしてまことの人なるイエス・キリストは、パンとぶどう酒のしるしのもとに主のからだと血において全体的に全面的に現在したもう」。⁽⁷⁾（傍線筆者） 代々のキリスト者がこの現在を述べる為に企てた公式化に触れ、言葉と表現の限界を認めつつ、尚、神の力とキリストの約束を信じて、この「現在」に向って立つ。両派の伝承での用語とそこに含まれている意味の違いを認めた上で、共通して「場所的あるいは自然的な現在の仕方」と、単に記念的あるいは比喩的な礼典理解を拒否する。「しるし、表徴」という用語を積極的なものとして認める。又、「キリストの現在は信仰者の信仰によってあるいはどのような人間の

力によっても生じるものでもなく、みことばを通して聖霊の力によって生じる」ことが明示されている。……「化体」又は「全実体変化」(transubstantiation) についてはどうか。ルーテル派は現代のカトリック教会の解釈を評価して、「化体の教義はキリストの現在とそこに起る変化の事実を証言しようとするもので、どうしてキリストが現在するようになるのかということ、説明する企てではない」⁽⁸⁾ (傍線筆者) と理解しようとしている。⁽⁹⁾ そして同派は、「“化体”と関連している観念的なものが誤りに導くのでこの用語を避けるがよい」としつつも「秘義を表現しようとする企ては妥当な道である」と認めようとする。⁽¹⁰⁾ この声明に含まれている諸点は省略したものも多いが、注目すべき点は前述の通りである。

さて我々はここで、もう一つの文献を資料として検討して見よう。それは Christianity Divided と題する書物で、以下の諸項目についてプロテスタントとローマ・カトリックの神学者たちが対話している。まず、聖書と伝統について、Cullmann と Geiselman, 聖書解釈学をめぐって E. Fuchs 及び A. A. van Ruler と M. Stanley, 教会論は K. Barth と G. Weigel, 問題の礼典論は、M. Thurian 及び H. A. Oberman と E. H. Schillebeeckx の討論である。最後に、信仰義認に関して、T. F. Torrance と Hans Küng が対話する。……当代に求め得る最高の発言者たちが揃っている。……Max Thurian が「主の晩餐におけるキリストの現在」という問題をとり上げる。彼はカルヴェンにおける聖餐理解に触れた後で、今日のエキュメニカルな神学的対話での「主の晩餐におけるキリストの現在」という問題を、八つのテーゼにまとめている。⁽¹¹⁾ トゥリアンのテーゼは、前述の共同声明が声明という性格からか、どちらかと言えば相互の基本線の確認と解かるべき誤解や理解不足の指摘に止まっているのに対して、聖書と神学の研究を土台として自ら信じるところを積極的に提言していると言えよう。以下、八つのテーゼを分析しながら畧述して見よう。(但し、筆者の

注釈は括弧に入れる)。

(テーゼ 1) キリストの身体と血は、

そしてキリストの人間性と神性とのすべては、
〔ここに受肉の真理との深い関わりを見る〕真に、全くの現実体として、
実体的に、聖餐に現在する。

このキリストの身体と血との現在は、十字架に架けられ給い、後に栄光を受けられたキリストが、今、ここに、具体的な表徴のもとに現在されるという事である。〔マッコーリーは、時間的、場所的現在から人格的現在へという思考ゆえに、具体的人格存在と経験とを稀薄化した。ここではキリストの現在が、「今、ここに、具体的な表徴のもとに」と深く関係づけられている〕。身体的存在とは、彼が常に一人物として具体的に存在し、他の人々と具体的に交わり得る事を意味する。身体と血との現在ゆえに、教会はキリストがそのただ中に具体的に現在したもうこと、又、教会が具体的な形でキリストを受けるとを確信する。しかし、キリストの実体的存在とは、自然的な意味での物質的存在を意味するのではない。それは十字架にかかり栄光を受け給うたキリストの身体と血との靈的実体(the inner reality)の現在なのである。〔ここでトゥリアンが「靈的実体」と呼ぶのは、逢坂元吉郎が「パンは一つのてだてであり、影にしか過ぎぬ。しかし、これを通してわれわれの方へイエスの御身体が越えて来るのである。かくて聖餐のパンは単なるパンではない。じっと深く見てイエス・キリストを見なければならぬ」⁽¹²⁾と述べた点が指摘されているが、⁽¹³⁾同じものが目指されてはいまいか〕。

(テーゼ 2)

栄光の主キリストは、父なる神の右に坐していたもう。その御方がいかにして聖餐に、身体的に現在したもうのか。これは正しく秘義であり聖靈の御業であって、教会の説明し尽し得ぬところである。キリストの現在は、パンとおどろ酒という物業に場所的に限定され理解されてはならない。キリストは物業の中に封じ込まれ得ない。しかし聖餐のパンとおどろ酒は、

我々がそこで全き人間性を持ち全き神性を持ちたもうキリスト御自身に、具体的に出会い彼を具体的に受ける特別な場でもある。かく、パンとぶどう酒をそのような場とし器とするのは、聖霊の業であり御言の働きである。〔ここでこのテゼーの神学者へのカルヴァンの影響は大きいものがある〕。

(テゼ 3)

それ故、聖霊と御言とによって、キリストはパンとぶどう酒という物業を全く支配される主でありたもう。彼はそれらを御自身へと引き寄せ、その全き人間性と全き神性とをそれらに引き受けさせたもう。福音によって、それらが真に、現実体として、実体的に、キリストの身体と血となるとは、このような道筋によってである。栄光の主は、教会においてその身体的現在を示すべくパンとぶどう酒の形をとりたもう。従って聖餐におけるパンとぶどう酒は、決して通常のパンとぶどう酒ではない。化学的変質を来すのではない。信仰によってこのパンとぶどう酒の新しい本質、即ち、このパンとぶどう酒の真に実体的本質なるキリストの身体と血とを確認せねばならない。教会はこのパンは化学的に本当のパンであり、このぶどう酒は化学的に本当のぶどう酒であるという事実で立ち止まらない。教会はこのパンとぶどう酒を執ってそれらを教会のただ中での身体と血との現在の具体的な表徴とされるという意味で変化することを信ずる。そういう意味では、物業はそこでキリストが見出され、意識をもって観想されて、具体的な形での交わりが成立する一つの場を構成する訳である。

(テゼ 4)

パンとぶどう酒をキリストの身体と血とするのは、天父よりの聖霊、及び感謝と聖別の祈りによる「記念」(アナムネーシス)の間、教会によって語られているキリストの言とである。

秘義が現実場に取る瞬間を決定する必要はない。従って聖霊とキリストの言とのかかる働きは、聖餐のあらゆる行動、特に Sursum corda「汝の心をあげよ」から始まって「アーメン」に至る感謝の祈り全体に亘ってなされると考えればよい。〔この後トゥリアンは、聖別の祈りや聖霊を求

める祈りに関する典礼について述べる〕。

(テーゼ 5)

パンとおどろ酒という形態は、キリストが我々の食物でありたもうこと
の表徴である。キリストの身体と血との現在が我々のもとへ来るのは、パ
ンとおどろ酒との表徴を通してである。この身体的現在は、そこにおいて
キリストが我々と共に働き、我々のために自らを与えたもう事を示す礼拝
行動全体の中で観想され受けられねばならない。

聖餐は聖なる対象ではない。それは行動であり、参与 (a communion)
である。パンとおどろ酒の表徴は、聖餐をして感謝の供物や執り成しとす
る。参与の輪は病者にまでも届いて行く。

(テーゼ 6)

聖餐に客観的に現在しているキリストの身体と血は、正しい意向で与か
る者をして聖化の道を歩ませ、不信をもってキリストの身体を確認するこ
とを拒否する者、自己中心のゆえに御体なる教会を否む者には断罪をもた
らす。使徒パウロが第1コリント11:27-34で告げる通りである。

(テーゼ 7)

聖餐式の後、病者のための配慮がなされた後、キリストと聖餐の物素と
の関係はどうなるのであろうか。尊崇すべき秘義に属する。

物素が、「取れ、食せよ、飲め……」と参与のために用いられた後に、
どのような関係がキリストと聖餐の物素との間に残っているのか詮索する
ことは我々に許されていない。秘義への尊崇があればよい。尊崇の念をも
って物素の処分をするのが適当であろう。

(テーゼ 8)

キリストの身体と血とに与かることは、同時に、教会の肢たる各自が互
いに交わり合うことである。我々はキリストに在って教会によって献げら
れた一つの供物を形成しているのであり〔教会が自己を奉獻するという犠
牲観が確立している〕、一つの体の肢として分たれ得ざる忠実な者たちで
ある。

もし教会が聖餐を作り出したと言うのなら、聖餐が教会を作り出しているとも言える。〔けだし、名言である。聖餐に関する教会史的、教理史考察は、この相関関係を解明すべきである〕。聖餐がキリストの体の肢を一体化し、熔接して行く。聖餐において、又、体なる教会において、受洗者たちが一体化されて行く。一体化する礼典として、聖餐は愛を保ち愛を深める愛の礼典である。エキュメニズムにおける共同聖餐は終着点でなく、聖餐によるこの一体化を知り認め合って行く手段である。かく個々の教会とその肢とが、全体教会 (the Church) へと愛にあって結びあわされて来る。そしてその業と言葉が世界にあって有効なものとなる。

以上がトゥリアンのテーゼの要約なのであるが、残念な事には今日のエキュメニカルな神学的対話の時代にあっても、このようなテーゼとは逆の相も変らぬ理解不足が散見される。(14)

「主の晩餐におけるキリストの現在」をめぐっての考察は更に発展し深化して行かねばならない。しかしそのような発展のためにも、是非ともこの課題を歴史的潮流のただ中から把え直す必要がある。そういう意味からも、我々の伝統と深い関係にあるウェスレーを、聖餐論の歴史的系譜の中で把え直し、彼の聖餐観を検討することを通してその貢献と限界とを直視し、明日の教会と聖餐経験とに資するものでありたい。

(第16集につづく)

(註)

(1) 英語では、the Lord's Supper, Eucharist, Holy Communion などと用いられる。厳密な用い方(熊野義孝、「教義学」第三巻における「聖晩餐」の例など)もあるが、木小論文では「主の晩餐」又は「聖餐」という用語を任意に用いた。

(2) John Macquarrie, Paths in Spirituality, London: SCM Press Ltd., 1972, pp. 73—93

(3) Ibid., p. 82

(4) ウェスレーの説教“The Duty of Constant Communion”は、

“frequent” でなく “constant” を用いたのである。

- (5) Cf. Gordon Rupp, “Introductory Essay,” A History of the Methodist Church in Great Britain, Vol. I, (eds. by R. Davies and G. Rupp) , London: Epworth Press, 1965, xvi—xviii.
- (6) T. A. Murphy et al., 「ユーカリスト：ルーテル、ローマ・カトリック共同声明」, 「布教」, 第22巻第5号 (1968)。
- (7) T. A. Murphy et al., 前掲, 11頁。
- (8) T. A. Murphy et al., 前掲, 19頁。
- (9) Max Thurian も同様の理解を示している。Max Thurian, “The Real Presence,” Christianity Divided: Protestant and Roman Catholic Theological Issues, (eds. D. J. Callahan, H. A. Oberman, and D. J. O’ Hanlon), New York: Sheed and Ward, Inc., 1961, pp. 204—205.
- (10) T. A. Murphy et al., 前掲, 19頁。
- (11) Max Thurian, op. cit., pp. 216—220.
- (12) 逢坂元吉郎, 「逢坂元吉郎著作集、上巻」東京：新教出版社, 1971, 474頁。
- (13) 赤木善光, 「逢坂元吉郎における体験のキリスト」, 「受肉のキリスト：逢坂元吉郎の人と神学」東京：新教出版社, 1975, 104頁—154頁。
- (14) 例えば Ch. ジェルネ, 「カトリック聖体論」, 「信仰と神学」(南山大学監修), 東京：中央出版社, 1974, 197頁以下の如き。